

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-13

「そこまでおっしゃると言うことは、キングのチェックが回避されたのですね！」と真紀は吉報が逃げないように、あえてチェス用語を使って婉曲的に尋ねた。

「サクリフェイス無しで勝てそうだね。あなたはやるべき手は打った。心配しないでのんびりとゲームを観戦していればいい」と辰巳は満足の笑みを浮かべて言った。

「ありがたいお言葉ですが、そもそも事の発端は、相談を持ちかけた私に原因があるのですから、はいそうですかと言う訳にはまいりません」と真紀は瞬きをしてからロブ・ロイを飲んで肩をすぼめた。

「あなたがいなかったら、彼女と出会えなかった。それだけで充分だと思っている」と辰巳は言って、スティンガーに口をつけた。

「『H美術館』の事をお聞きしてもよろしいですか？」と真紀は少し前から思案していたことを切り出した。

「いきなりなんだね……」と辰巳は訝りながら訊いた。。

「言いにくい話ですが、絵を買っていただきたいのですが……」

「一体全体どういうことなのか、話の先が読めないじゃないか！」と辰巳は荒げた語気の声尻を何とかトーンダウンさせて言った。

「私の裸婦像を『H美術館』で購入していただきたいのです」と真紀は意図的に直球を投げた。

「……？……。あっ！」

「そうです。ご推察の通りです」

「噂には聞いていたが、どうしてまた？」

「どうあっても麻里子さんに協力したいからです。私にも一枚囁ませてください」と真紀はきっぱりと言った。

「……承知した。ここでクイーンサクリフェイスの勝負手を指されたんでは仕方がない」

「それは裸婦像をご覧になってから、ご判断なさってください」と冷静に言葉を返した真紀だったが、唐突なお願いを呑んでくれた辰巳のリアクションに胸底で手を合わせていた。

「で、噂だと2点あるはずだが、それはどこに？」と辰巳は身を乗り出して尋ねた。

真紀がパークハイアットホテルでの横田の個展に裸婦像を展示することを画商の朝倉に了承したその日の夜に、何の因果か堀内が急死してしまった。

取り乱しながらも、事後対応をこなしていた真紀は、数日後に朝倉と会って、大切な人の死を悼む心情を真摯に話して、約束を反故にしたい気持ちを伝えた。

真紀は激しい抵抗を覚悟していたが、朝倉は拍子抜けするほど好意的に受けとめてくれた。